

モーツァルト 最後で最大の謎

ティトス帝と魔笛とレクイエム、または、偽善と嘘と未完成

2011/07/30



みなさん、こんにちは。本日は、名古屋モーツァルト協会主催の納涼祭の講演会においでいただきありがとうございます。

本日の私の講演テーマは、「ティトス帝と魔笛とレクイエム、または、偽善と嘘と未完成」です。すなわち、「死の年のモーツァルト、または、モーツァルトの最大で最後の謎」について、お話しします。

まず、本日のテーマの真意は、「なぜ、モーツァルトは死ぬ前に、《ティトス帝の慈悲》と《魔笛》と『レクイエム』を三つ同時に書いたのか」ということです。むろん、みなさまは、「それはおかしい。モーツァルトは、死ぬ前にこの三つを自分で選んで書いたのではない。それぞれ三つ同時に、偶然頼まれたのであって、モーツァルト自らが書こうとして集めたものではない」とおっしゃるでしょう。まったく、その通りです。でも、モーツァルトのことです。この偶然を利用して、死を前にしたモーツァルトが、「これだけは後

世に人たちに言ってから死んでいきたい」とおもって、特別の意図を持って書いたとしたらどうでしょう。すなわち、モーツァルトは、この三作を並べておいて、まとまった「三題嚙」として書いたとするならば、その真意はなんだろうかーと考えてみようというのです。なんと、規模雄大で、モーツァルトの最後で最大の謎に挑む、まさに名古屋モーツァルト協会らしい素晴らしいテーマではありませんか。(笑い)

この三つの作品については、もうみなさんすでに充分ご承知だと思いますので、特にあらためてここでご説明することもないでしょう。でも、念のため、書かれた経緯などを中心にご紹介しておきましょう。

まず、この三作はどの順番に書かれたのでしょうか。それに、ケッヘル番号は、どの順になっているのでしょうか。これもご存知、《魔笛》K.620、《ティトス帝の慈悲》K.621、「レクイエム」K.626.の順になっています。初演は、《ティトス帝》が一番早く、依頼の予定通りの9月6日初演であり、《魔笛》は9月30日が初演でした。ケッヘル番号は、《魔笛》はK.620で、その前に初演された《ティトス帝》がK.621で《魔笛》よりもあとになっています。これは、モーツァルトが、「自作全作品目録」に、「《魔笛》1791年7月」と日にちを書き入れているからです。それで、《魔笛》は7月完成であり、9月6日の日付けがある《ティトス帝》が最後のオペラとなりました。そのあとで、《魔笛》の初演前に、残っていた最後の合唱と序曲を書いたのですが、もうすでに大筋での勝負はついていました。したがって、モーツァルト最後のオペラは、記録的には《ティトス帝》であるが、完成時からすれば《魔笛》と言うことになってしまいました。みなさんは、好きな方をおとりいただければいいのです。

《ティトス帝の慈悲》

まず、《ティトス帝の慈悲》です。これは、ピエトロ・メタスタージオ(1698-1782)が1734年に書いた台本を、カテリーノ・マッツォラが書き直して台本を作りました。モーツァルト1791年9月6日にプラハの国民劇場で初演しました。1791年に、皇帝ヨセフ2世のあとを受けて弟のレオポルド2世がハプスブルク家の皇帝として即位しました。彼はボヘミア王でもあったのでプラハで戴冠式を行ない、そのためにモーツァルトが祝典用のオペラ・セリア《ティトス帝の慈悲》を依頼されました。依頼主はボヘミアの統治団で、プラハの興行師ドメニコ・グアルダゾーニと制作の契約を結んだのが7月8日でした。

グアルダゾーニは、まず、ウィーンの宮廷楽長サリエリに作曲を頼みました。当時、ウィーン宮廷劇場の指揮者も兼ねていたサリエリが多忙で断ったので、プラハとはなじみの深いモーツァルトに話が回ってきました。7月10日にウィーンに着いたグアルダゾーニは、モーツァルトがバーデンから戻るのを待つて12日に会って交渉しました。むろん、お金がないモーツァルトはすぐに引き受けました。残念なことに、ダ・ポンテは、新皇帝レオポルド2世と仲が悪くすでに解任されていたので、台本はウィーンに滞在していたドレスデンの宮廷詩人マッツォラに依頼されました。上演予定日は、9月6日で、すでに2ヶ月を切っていました。グアルダゾーニはその足でイタリアへ行き、歌

手たちを集めにまわりました。

モーツァルトのオペラ・セリアは、《フィガロの結婚》や《ドン・ジョヴァンニ》といった彼のオペラ・ブッフアに比べてあまり高く評価されていません。特に、この《ティトス帝の慈悲》は、モーツァルトの晩年の大作であるにもかかわらず、モーツァルト・ファンのだれもが多くに関心をしめさないままで、一人とり残されています。理由は、「全体に疲労感が漂っている」「祝典に重きをおきすぎて歌劇として楽しくない」「急遽6か月で仕上げたので弟子のジュスマイヤーが手伝った稚拙な部分がある」「オーケストラも簡潔すぎる」「アリアも短い」「メタスタジオの原作台本があまりにも古風で複雑で不自然」「マツォラの台本も陳腐」「モーツァルトにしては人物の音楽描写に欠けていて人間味がない」「セストとアンニオという主役の男性二人が女声（ソプラノ）で書かれていて現実味と迫力がない」などなどです。あの生気に満ちあふれユーモアと人情の《魔笛》に比べたらどうにも分が悪いのです。

原作と台本 モーツァルトのオペラ・セリア《ティトス帝の慈悲》の原作は、ウィーンの宮廷詩人メタスタジオの有名な台本によるものです。といっても、これは、古くは1734年にウィーンの皇帝カール6世の命名祝日のために書かれたもので、アントニオ・カルダラが作曲して初演したかなり以前のもので、《ティトス帝の慈悲》は、その後もいろいろな作曲家によってもオペラ化されています。1738年にはハッセの作曲でドレスデンで初演され、1746年にはヴァーゲンザイルによってウィーンで、1752年にはグルックの作曲でナポリで、翌1753年にはヨンメリの作曲でシュトゥットガルトで初演されています。メタスタジオの台本で、驚くなかれ40種類以上のオペラが、モーツァルト以前に作曲されているのです。

しかし、なぜ、モーツァルトとその制作者たちは、こんな旧弊な台本を選んだのでしょうか。それは、ひとえに完成を急いでいたためにほかなりません。まず、9月初めのプラハでの戴冠式のお祝いに間に合うことが第一だったのです。モーツァルトは、直接の台本として、支配人グアルダゾーニの指示通りにマツォラが改作したものを使用しました。マツォラは、原作の3幕仕立てを2幕にまとめ、アリアの多くをレチタティーヴォに書きなおしました。チェンバロの伴奏で歌われるレチタティーヴォ・セッコなら、弟子のジュスマイヤーでも書けたからです。また、25曲あったアリアを11曲に減らして、重唱を増やしています。三つの二重唱、三つの三重唱、それに、五重唱と六重唱を一つづつ入れて、合唱を五つ加えています。改作ではなく、根底からの全くの改竄です。

物語は、ほとんどが史実に基づくもので、実在したティトス帝の慈悲あふれる功績を最大に讃えるものです。残虐非道な悪人皇帝の多いローマ皇帝の中でも、もっとも高くその人格が評価されるのが皇帝ティトス（紀元39-81）です。彼の在位は、西暦紀元後79年から81年のわずか2年3ヶ月の短い期間でした。彼の前には、例の皇帝ネロがいて、ネロが自殺したのが紀元68年でした。そのあとをオトという人物が皇帝を詐称してその地位に就きましたが、それを良しとしないヴィテリウスによって殺されました。皇帝についていたヴィテリウスを、追い出したのがオリエン特軍団によって推挙されたヴェスパニアヌス帝でした。ヴェスパニアヌス帝は善政を敷いて、しばらくの間、ローマの平和がつづきました。そのヴェスパニアヌス帝の長男がティト

ス帝で、彼がそのあとのローマ皇帝となりました。

39歳の彼が即位したのが紀元79年でしたが、その即位の年にナポリ近郊のヴェスヴィオス火山が噴火して大惨事が南イタリアを襲いました。ティトス帝は直ぐに被災者対策本部を現地に置き、皇帝自らが乗り込んで陣頭指揮をしました。犠牲になって亡くなった人で相続人のいない者の財産は国庫に入れず、被災者の復興費用に宛てました。その翌年の80年にはローマを悪病と大火災が襲い、ティトス帝は急遽ローマに戻りましたが多く人が亡くなりました。その翌年の81年にはティトスは病で亡くなります。短い在位でしたが、ティトス帝の善政は確たるものがありました。そのお話のひとつが、このオペラ《ティトス帝の慈悲》によって語られます。

このオペラで紹介されている「ティトス帝の慈悲」の数々をお話しておきましょう。ティトス帝は、父親のヴェスパニアヌスと一緒に戦ってユダヤを征服しました。その戦利品として、ユダヤの王女ベレニケを「妻にする」といってローマに連れて帰ります。父の死後、皇帝になったティトス帝は約束通りにベレニケを皇妃にしようとしませんが、「クレオパトラで懲りたのでローマの皇帝は異国の王女を皇妃にすべきではない」という元老院や人民の反対によって、「裏切られた」と怒るベレニケをなだめてユダヤへ帰します。これがティトス帝のローマに対する「第1の慈悲」です。ティトス帝は、次いで友人のセストの妹セルヴィーリアを皇妃に迎えようとしします。セルヴィーリアは、すでに、ティトス帝とセストの友人であるアンニウスと婚約をしているので、セルヴィーリア本人がこれを断わります。するとティトス帝は素直にセルヴィーリアとの結婚をあきらめます。これが「第2の慈悲」です。

セルヴィーリアは皇妃に、ヴェスパニアヌスが皇帝の座を奪ったヴィテリウスの娘ヴィテッリアをすすめます。ティトス帝は、ヴィテッリアの復権を許すために、それを承諾します。これが「第3の慈悲」です。一方、ヴィテッリアは、奪われた皇帝の座をティトス帝からとりもどそうと、セストにティトス帝を暗殺するようにそそのかします。ヴィテッリアを愛するセストは、神殿に火をつけティトス帝の暗殺を実行しますが失敗して捕まり、元老院によって猛獣の刑に処されようとしします。ティトス帝は、反逆罪は罰せず、彼を許します。これが「第4の慈悲」です。すべてが露見したとさとしたヴィテッリアが、「ティトス帝暗殺の首謀者は自分です」と名乗り出ます、ティトス帝は彼女も許します。これが「第5の慈悲」です。その他にも、ヴェスヴィオスが噴火してポンペイが壊滅すると、属国からの税金をすべて復興資金として差し出します。これが「第6の慈悲」です。

このオペラ・セリア《ティトス帝の慈悲》で、モーツァルトは初めて公に政治問題を論じた — といっているでしょう。しかし、結局、《ティトス帝の慈悲》の真意は、「偽善は善である」と言う平凡な結論に達しました。「偽善」といえば、東日本大震災の1月後の4月11日の朝日新聞朝刊の朝日歌壇に次の歌が載りました。

金持ちの偽善だという人かなしありがとう孫さん遼君イチロー選手
陸前高田市 古手川唯 (県立高校3年生)

《魔笛》

《魔笛》の真意は、自由・平等・博愛。

私たちは、「フランス革命の理念は自由・平等・博愛である」と覚えました。でも、この三つは、内容的に明らかに違います。「自由」と「平等」は革命の目的ですが、「博愛」は、「自由」と「平等」を成就させるための方法にすぎません。「自由」だけでは自由は守れません。「行き過ぎた自由」は、だれかにとっての「自由」であっても、だれにとっても「自由」ではありません。「平等」だけでは平等は守れません。一律の「平等」は返って不平等生みます。人民全員にパンを一個づつ平等に与えても、大人には少なすぎ、子供と赤ちゃんには多すぎることとなります。「自由」と「平等」の理念を正しく達成するためには。お互いがお互いを守りあうための「博愛」がなければならないのです。フランスの革命学者のアンリー・ルフェーヴルは、「平等が一番大事だ」といいます。

「レクイエム」

なぜ、「レクイエム」は未完成に終わったのか

「死には逆らえない」「人間はいつかは死ぬ」とモーツァルトは言うのです。死んだ人はもう帰ってこないのです。「古事記」の「伊弉諾と伊弉諾」や「ギリシャ神話」の「オルフェウスとユリーディチェ」のお話を思い出していただければ結構です。「死ぬとは、モーツァルトが聴けなくなることだ」と相対性原理の発見者アルバート・アインシュタインは言っています。彼の真意は、「生きているうちに、モーツァルトをどんどん聴いておこう」というのです。

モーツァルトは、三つの作品の中で、この「レクイエム」を最後にもってきました。彼は、この作品は完成させないでおこうと思ったのです。「私は、《テイトス帝の慈悲》で偽善であっても、善を行なうことは人間の使命だといっておきたい。《魔笛》で、真理を追究するには感性に裏打ちされた理性があると伝えたい。そして、『レクイエム』では、人間は必ず死ぬ、運命には逆らえない、死を覚悟せよーと述べておきたい」と思ったのです。

個人的な恨みを晴らす

モーツァルトがこの三作で語ろうとした「もう一つの遺言」は、彼の人生における極めて個人的な意趣返しです。この三作で、「死ぬ前に、やつらに恨み辛みを晴らしておこう」と考えたのです。それも、モーツァルトらしい極めてユーモラスなやりかたで。

ジュースマイヤーへの意趣返し

まず、《ティトス帝の慈悲》で、モーツァルトは、作曲家ジュースマイヤーへの復讐を果たします。モーツァルトの弟子とされるフランツ・クサヴァー・ジュースマイヤー (Franz Xaver Süßmayr, 1786-1803) は、ウィーンで活躍したオーストリアの作曲家で、初めアントニオ・サリエリに師事しました。モーツァルト家とは親しく、モーツァルトの《ティトス帝の慈悲》のレチタティーヴォを書く手伝いをして、一部を作曲したとされています。また、モーツァルトが亡くなった後で「レクイエム」の未完の部分を書き足しました。

モーツァルトの妻のコンスタンツェがバーデンへ温治に行くときには、モーツァルトに頼まれて一緒についていきました。ここで二人の間にいわゆる「不倫の関係」が生まれたともいわれています。モーツァルトは、そのことを仲間から揶揄されても、ただ笑ってすませています。むしろ、モーツァルトは二人の関係を充分知っていたことでしょう。

それで、《ティトス帝の慈悲》です。この歌劇を初演するために、モーツァルトは妻とジュースマイヤーを連れてプラハへ行きました。むしろ、ジュースマイヤーは、日夜、モーツァルトを助けて《ティトス帝》の完成に大いに寄与しました。友人を許すティトス帝の慈悲の数々を、モーツァルトも、ジュースマイヤーも知っていました。

モーツァルトの成長した子供は二人だけです。長男（実際には次男）のカール・トーマス・モーツァルト (Karl [Carl] Thomas Mozart, 1784-1858) と次男（実際には四男）のフランツ・クサーヴァー・ヴォルフガング・モーツァルト (Franz Xaver Wolfgang Mozart, 1791-1844) です。

カールは、父親が亡くなったときにはまだ7歳でしたが、母親は彼をプラハのギムナジウムの教授フランツ・クサーヴァー・ニーメチェクのもとに送り、一般教育とピアノを学ばせました。のちにヨーゼフ・ハイドンの推薦状をもってミラノへ行き、ミラノ音楽院の院長ボニファツィオ・アジオーリに師事しましたが、音楽家になるのをあきらめてミラノの役人になりました。父親の名声を維持することにも努め、1842年にはザルツブルクで行なわれたモーツァルト像の除幕式にも立ち会っています。1856年には、ザルツブルクのモーツァルテウムに父親の遺産のハンマーフリーゲルを寄贈したり、父親の蔵書や楽譜をあちこちに譲ったりしています。74歳のときミラノで亡くなりました。

フランツ・クサーヴァー・ヴォルフガング・モーツァルトが生まれて4ヶ月後に父モーツァルトが亡くなっています。フランツは、サリエリとフンメルに師事しました。ロマン派の作曲家ウェーバー (1786-1826) やシューベルト (1797-1828) とほぼ同世代ですが、古いドイツ古典派の音楽を書いていました。母コンスタンツェは、彼を、「ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト2世」として売り出しましたが、結局、音楽家としての才能はなく、「偽のモーツァルト」と呼ばれるようになりました。

フランツ・クサヴァーは、ジュースマイヤーの名と同じなので、ジュースマイヤーとコンスタンツェの不義の子ではないかとされています。子供に「フ

ランツ・クサヴァー」の名をつけたのはモーツァルト自身かも知れません。カールもフランツも生涯独身で子供がなかったので、大作曲家の血筋は途絶えてしまいました。

シカネーダーへの意趣返し

もう一つの個人的な遺恨は、《魔笛》におけるシカネーダーへの当てつけです。

「レクイエム」でモーツァルトが晴らしたかった遺恨は、彼自身へのものです。それは、彼の人生への恨み辛みです。「魂魄この世に留まりて恨みはらさでおくものか」といったところです。

都築正道